

に乗って、ポリネシアを自由に論じた一冊であった。

### 引用文献

印東道子. 2017. 『島に住む人類—オセアニアの楽園創世記』臨川書店.

佐藤若菜. 『衣装と生きる女性たち—ミャオ族の物質文化と母娘関係』(地域研究叢書40) 京都大学学術出版会, 2020年, 310p.

青木恵理子\*

本書の主題は「中国農村部に暮らすミャオ族の民族衣装の製作から着用, そして保管や譲渡に至るまでの過程を通した, 母娘関係の動態である」(p.15). 著者は, 歴史的に, 特に18世紀清朝の直接統治による漢化により, 漢族的な父系制をとるようになったミャオ族の研究のために, 漢族の親族研究の歴史的展開をたどり, 等閑視されてきた女性の親族関係に注目する. また, ミャオ族固有の婚姻慣習を進化の遅れた母系制の名残と位置付けるような, 現代中国のアカデミズムの現状を批判的視野に捉えながら, 1949年以降の国家史の変容というマクロな状況のなかで展開されてきた, ミャオ女性の生活というミクロな営みを, 文献とフィールドワークを通じて明らかにすることを目的としている(序章).

フィールドワークの時期は2009年から2011年, 場所は貴州省黔东南ミャオ族トン

族自治州施秉県馬号郷S村. 焦点は, 「河辺ミャオ」の女性及び彼女たちの衣装製作である. ミャオ族は, モン, コ・シヨン, ムウに下位区分され, 河辺ミャオはムウに属す. 中華人民共和国は, 成立当初, 支配のみならず知識さえも及ばない膨大な辺境地域を抱え, 「ミャオ族」を少数民族公認カテゴリーのひとつとした. 辺境をタクソノミー的に治めるべく国家が実施した調査の結果, 辺境の多様な人々が「ミャオ族」に包含されることになった. 分類のために期待をかけた指標が, 女性の「民族衣装」であった. なかでも, 貴州省東南部のミャオ族の鮮やかな手作り衣装は, 国家行政や国内研究者だけでなく, 国外の服飾研究家等を惹きつけ, 「民族衣装」のより詳細な静的分類体系化へと誘った. それに対し本書は, 女性の衣装が製作され, 着られ, 交換され, 売買される現場に参与しながら, 女性と衣装の動態を明らかにしている(第1章, 付録読書案内).

S村河辺ミャオの女性の民族衣装のなかでも特に重要な「上衣 *ud*」に着目し, その構成部分の名称, 刺繍などの違いによって区別される30種類の記述的名称と使用されている刺繍糸の色と生地の色を一覧によって示し, 多数の写真も提示している. 上衣の名称は, S村の多くの女性によって使われているものもあれば, 各女性によって異なるものもあるという. ひたすら記述的に増殖しうる名称は, 外側からなされる「民族衣装」という均質なカテゴリーに収れんしない. S村では, 優れた刺繍とは, 確かな技術で, 独創的革新的な模様を描き出しているものであると彼女

\* 龍谷大学

たちは語る。本書は、外側から与えようとする静的で集合的な「伝統」イメージでは捉えられない、時間的経過のなかで、個人の「心 *khangd niangs*」を通じて創造される衣装のありかたを提示している（第2章、第5章）。

現中国成立当初は、河辺ミャオの地主と富農のみが「良い上衣 *ud vut*」を所有していたが、地主制解体とともに、衣装を含む彼らの財産は没収分配された。S村の河辺ミャオにとって、糸紡ぎから始まるさまざまな工程をこなして衣装を製作することが唯一の衣類調達法だったが、1950年後半から1978年改革開放政策以前は、農業集団化と飢饉の時代で、衣装の製作に携わる余裕はなかったと女性たちは語る。1974年ごろから、農業集団化が緩和され、衣装製作が再開された。1980年には国家の政策転換により各農家の個別経営が普及し、S村でも生活に余裕が生まれた。その結果、衣装の材料が購入できるようになり、「良い上衣」の製作が広まったが、綿糸紡ぎや織りの技術は衰退した。1993年から男女とも沿海部へ出稼ぎに行くようになり、現金がS村にももたらされ、銀装飾や衣装製作の材料やパーツの購入が一般化し、「良い上衣」の所有数が増えた。同時に、市場経済の浸透により日常着は洋服となり、民族衣装は礼服や威信財となった。また、改革開放後、中国が対外的な交流を開始したことにより、「ミャオ族の民族衣装」が海外で注目されるようになり、1980年代には、近隣の町にも外国人観光客が訪れ、それらを高値で直接購入するようになった。このような商品化の影響は、さまざまなかたちで

S村の河辺ミャオ女性たちにも及んだ。商品化はいくつかの水準で起こり、著者の調査当時、衣装のパーツや土産物の「ミャオ族の刺繍」の製作販売には、S村の漢族女性たちも参入し、ミャオ族に閉じたものではなくなっていることを本書は示した（第3章、第4章）。

本書の主題「民族衣装をめぐる母娘関係の動態」を捉えるために焦点が当てられているのは、娘の婚出である。現中国は、成立以来婚姻法を定め、国民の婚姻を統制しようとしてきたが、調査当時施行されていたのは、1980年制定の婚姻法であった。それは、本人の配偶者選択の自由を保障し、人口抑制と近代化に役立つ人材の輩出を主な目的としている。また婚姻登記を義務付けることにより、結婚年齢と子どもの数を国家の統制下に置くようにした。漢族に対するよりも弾力性をもたせて、少数民族の結婚可能年齢は男20歳女18歳、子どもの数を2人としている。S村において、婚姻登記が普及し始めたのは、1990年ごろであるが、そのころから、ミャオ族の慣習である坐家が行なわれなくなった。坐家とは、婚礼の儀礼後何年間か生家に住み続ける慣習である。その間、花嫁は、農作業などの労働から免除され、婚家に移動する際に持参する衣装を、集中して製作した。改革開放後の経済発展のための労働者育成が必要となり、義務教育法が1986年に制定されて、中学までの義務教育が受けやすくなった。S村でもその影響は大きく、調査当時、30代半ば以下の女性はほとんど中学を卒業し沿海部に出稼ぎに出るようになって

た。女性は、教育と出稼ぎ、坐家なしの結婚、という新しいライフコースを選択するようになり、婚家に持参する衣装の製作は、母親の役割となった。さらに、出稼ぎ先で娘が漢族男性を配偶者として選ぶことも多くなり、衣装を作る必要がなくなることも増えた。かつては両親が子どもの配偶者を選んでしたが、配偶者選択の自由という考え方が広まり、学校や出稼ぎ先が出会いの場となり、母娘間の対立が起きることも多くなった。さらに、若い女性とその母親の間には、女性の賢さについての考え方にも違いが生じている。母親の世代では、創造的に素早く刺繍ができることが、賢さとして評価されるが、若い世代には、それを見下し、勉強ができることや現金が稼げることに女性の賢さがあると主張する女性も出現し、母娘間の対立や緊張が生じることも多い(第5章)。

そのような状況のなかでも、河辺ミャオ男性と結婚する娘のために衣装を製作する母親は多い。かつて、花嫁は、坐家を終え、自ら製作した衣装とともに婚家に移動した。しかし、調査当時、娘のために母親が作った衣装だけでなく娘自身が作った衣装も、婚家に移動させず、母親が保管し、第二子を出産した後か母の死後に移動させる傾向が高かった。ここで、それはなぜか、という、本書の中心となる問いが発せられる。母親からは、婚家に運んでしまうと、離婚した場合に、姑に取られてしまうからだという回答もあった。しかし、著者は、母親が衣装を保管しておくことにより、母娘がお互いを配慮し続け、つながりを維持している、という理解を提出す

る。かつてあった坐家の期間のように、母による衣装の製作と保管という長い期間をかけた、母と娘の分離の過程が形成されるようになったとする。そして、終章では、ミャオ族の女性たちは、衣装とともに生きるかたちを創造しながら、中国における急激な変容のなかを生き抜いているようだ、と結んでいる(第6章、終章)。

国家の影響の大きいマクロな変容のなかにある、S村河辺ミャオの女性たちの生活に寄り添い、文献とフィールドワークデータを交差させながらそれを描き出している本書が学術的貢献をなしていることは間違いない。ただ、課題もいくつか残している。

そのひとつは、物質性という概念の使用である。これを導入することによって、対象の理解を進展させるには至ってない。また、同村に居住する、河辺ミャオ、漢族、高坡ミャオ(ムウに属す)間の関係について、より多くの資料が必要である。婚姻、階層、邪術、侮蔑、忌避に関する、河辺ミャオ女性の言説は比較的たくさんあるが、それがどれだけ社会的実態をとまなうものであるのか、漢族や高坡ミャオや河辺ミャオ男性の言説や、関係をめぐる出来事がほとんど記述されていないため、明確になっていない。また、人口567人(出稼ぎにより在村281人)のS村全体が、どのような社会的空間をなしているかについての記述が少ないために、河辺ミャオの女性たちを社会的に位置付け難い。親族集団や姻戚関係全体に関する記述がないところも、なぜ母娘関係を主題に選ぶかという点をぼやけたものにしてしまっているように

思う。

今後の研究をさらに説得力あるものにするためには、以下のことが役に立つと思う。現地の人たち同士の会話を記録して伝えること。モノ研究と語りの研究は、相互排除ではなく、相互補完的関係にある。村内の社会的出来事を伝えることも役に立とう。重要なのは、男性たちに民族誌のなかに登場してもらうこと。未婚の女性が男性と話すことの困難な社会だと本書で述べられているが、高齢の男性、小中学校の先生、貴州大学の同僚男性などの力を借りて、実現できないだろうか。

最後に、J.スコットのゾミア論の眼差しで、この地域全体をみてみることを提案したい[スコット 2013]。彼の本の第一章は、貴州省南部の複雑に入り組んだミャオの山地に分け入り、混沌とした民族区分や土地所有や方言、ひとつの場所に対する何十もの名づけを前に、途方に暮れている役人による記録から始まり、その他の箇所でも、逃避し抵抗するミャオについて繰り返し記述されている。この眼差しをとおすと、S村の漢族、河辺ミャオ、高坡ミャオの関係が、地形や「文明」の高低をめぐる展開されてきた人々の動態のなかに位置付けられ、そこから中国という国に相対化の光を当てられるのではないだろうか。

#### 引用文献

スコット, C. ジェームズ. 2013 (2009). 『ゾミア—脱国家の世界史』佐藤仁監訳, 池田一人・今村真央・久保忠行・田崎郁子・内藤大輔・中井仙丈訳, みすず書房.

土佐桂子・田村克己編. 『転換期のミャンマーを生きる—「統制」と公共性の人類学』風響社, 2020年, 330 p.

小林 知\*

本書は、2012～16年に国立民族学博物館で行なわれた共同研究の成果として編まれた。ミャンマーでは、2011年に軍政からの民政移管が行なわれ、2016年4月にはNLDを与党とする新政府が誕生した。その前の1988年には1962年から続いたネーウィン体制を動揺させ、後の変革の起点となった民主化運動があった。

本書は、体制移行期を生きたミャンマーの人々の経験とその社会の様子を、統制と公共性に注目して考察する。統制は、軍政期にその社会と人々の生活に深く埋め込まれた。公権力による暴力や制度による管理だけでなく、自己統制の文化が人々によって内面化された。その統制をめぐる変化を問う着眼点が、公共性（公共圏）である。公とは何か、公にとっての善とは何かを自由に語ることが許されなかった時代を長く生きたミャンマーの人々が、それを語り、主張することができるようになったとき、社会にどのような動態が生まれるのか。本書は、その状況が示す可能性と問題を描き出す。

第1部「統制のほころびと新たな公共性の行方」は、1970年代から近年までのミャンマー社会の国家＝社会関係を考察する。第1章『「経験」された統制—社会主義時代に

\* 京都大学東南アジア地域研究研究所